

オルフェーレニングラード伯爵が、女神アステリアの夢を見たのは、雨が降る夜だった。

夢の中の女神は、黄金色に輝く絹のようにやわらかそうな髪をし、いつしか教会で見たレリーフよりも美しく神々しかった。

オルフェは畏怖を感じながらも、女神の前に跪いた。跪いたオルフェの頭上から、女神の声が聞こえてきた。

「グエン村にいる赤毛の孤児を養子にせよ」

グエン村は、レニングラード領にある村で、国境の近くに位置するせいもあり、先の戦争の被害も甚大な所だ。

「赤毛の孤児、ですか……？」

オルフェは女神に問いを投げかけようとしたが、女神の姿は霧に包まれたように、ぼやけてきた。そこで、オルフェは目を覚ました。

寝室は薄暗く、まだ夜は明けていないようだった。

「夢か……」

夢ではあっても、女神のお告げを無視することはできなかつた。

夜が明けるとすぐに、オルフェは馬を走らせた。

赤毛の少女——ダイアナは、レニングラード伯の部屋に連れてこられた。両親が先の戦争で死に、途方に暮れていたところ、オルフェーレニングラードと名乗る、貴族らしき男に訳も分からぬまま、立派な屋敷に連れてこられ、今まで着たことも無いほど豪華で綺麗な服を着せられた。

ダイアナを連れてきた男は、優しく微笑んだ。

「ダイアナ。今日からお前は、ここに住むのだ。私は、お前を養子にしたのだよ」

「養子」の意味が分からず、ダイアナは男に尋ねた。

「ようし、とは何ですか？」

「簡単に言う……お前は私の、血のつながりのない子供になったのだ。今日から私がお前の父だ」

ダイアナは目を丸くした。この男が自分の父になるとは、どういうことだろう。

新しい父親ができたことで、実の父親の存在を否定された気分になり、ダイアナの目から涙が零れ落ちてきた。

オルフェはダイアナが泣き出したのを見、慌てたように声をかけた。

「どうしたのだ？——私が父親になるのが嫌なのか？」

ダイアナは泣き出した理由を告げようとしたが、涙が止まらず、言葉が出てきてくれない。

なかなか問いに答えようとしないダイアナの様子に怒ることもなく、オルフェは部屋の隅に控えていた女性に

声をかけた。

「ディアナを自室に連れていけ。様子が落ち着いたところ、訪ねるとしよう」

「かしこまりました」

女性はディアナの肩に手を置くと、部屋を出るよう促した。ディアナは大人しく従い、オルフェの部屋を後にした。

女性の後をついている途中、前を歩く女性が小声で咳くのが聞こえた。

「いつまで泣いているんだか。自分が幸運だと思わないのかしらね」

その言葉が聞こえてしまった瞬間、心臓を驚掴みにされたような衝撃が襲ってきた。

自分が幸運？ 両親を亡くした自分が？

頭の中に、様々な考えが浮かび上がり、考える間もなく、ディアナは廊下を走り出していた。

「ディアナ様！ どこへ行かれるのです!？」

女性の声が聞こえてきたが、構わずディアナは走り続けた。とにかくこの屋敷から逃げ出したくて、手当たり次第に扉を開けた。

何度目かの扉を開けると、花がたくさん咲いている、生垣がある庭に出た。

この生垣の陰にしゃがみこんでいれば、誰にも泣いている姿を見られる心配はない——そう思っていた。

「いつまで泣いているんだ」

声が出た方を見ると、ディアナより五歳ほど年上に見える少年が立っていた。意志の強そうな瞳が印象的だった。

仕立ての良い身なりから推測するに、レニングラード家の者だろう。ディアナはしゃくり声をあげながら立ち上がり、お辞儀をした。

「お前が、父上が言っていた孤児か」

「孤児」という言葉を聞いた瞬間、もうこの世に父と母がいけないことが胸に迫ってきた、涙が堰を切ったようにあふれ出してきた。

「泣くな！」

少年の声に、ディアナは肩を震わせた。恐る恐る少年の顔を見上げると、少年は怒ったように口を結んでいた。

「お前はレニングラード家の者になったのだ。貴族はそう簡単に泣いてはならぬのだぞ」

ディアナは溢れ出てくる涙を堪えながら、声を絞り出した。

「なら……貴族様になんてなりたくありません」

「何？」

「泣いて、いけないなら、私は……平民のままです、いいです」

「いいか、お前は運が良い方なのだぞ！ この国に孤児がどれほどいると思っている！」

少年はディアナが着ている服に視線を移した。

「このような仕立ての良い服を着たことがあったか？」

ディアナは頭を振った。

「お前は義理の父親だけでなく、貴族という身分を手に入れたのだ。自分がどれほど恵まれているのか考えろ。」

——それでも泣き止まぬなら、とんだ罰当たりな奴だな」

よく考えてみると、次第に少年の言葉が的を射ていることが理解できた。

ディアナは唇をかみしめ、必死に涙を抑えた。

その姿を見て、少年はやつと表情を和らげ、ディアナに右手を差し出してきた。

「私はエルトレスⅡレニングラード。オルフェ伯爵の長子だ」

ディアナは差し出された右手を、取った。

「私はディアナと申します」

ディアナがレニングラード伯の養子になって、十年が経った。

ディアナは屋敷の祭壇の前に跪いて、朝の祈りを捧げていた。祀つてあるのは、女神アステリアだ。

祈りが終わり、ディアナが立ち上がるのと同時に、侍女のカタリーナも祈るのを止めた。

カタリーナは、ディアナが平民の出であることを気に

せず、甲斐甲斐しく仕えてきてくれた侍女だ。歳が近いこともあり、ディアナは彼女のことを信頼していた。

「さあ、行こう。数式の勉強の時間に間に合わないわ」

「はい」

自室に戻る途中、義父のオルフェにばったり会った。

義父はディアナの姿を認めると、目を細めた。

「祈りの帰りか。熱心なことだ」

ディアナは頷いた。

「はい」

ディアナは元が平民とは思えぬほど、美しく育っていた。

「そなたを見てみると、身分で容姿は決まらぬものだと  
思い知らされるな」

「え？」

「そなたが貴族の血を引いていないなど、誰も信じぬだらうな」

義父の言葉に、ディアナは微かに顔を曇らせた。身分で容姿など決まるはずがない。平民より貴族の方が見栄えが良く見えるのだとしたら、それは、身なりのせいだ。

「そろそろお前の嫁ぎ先も探さなければな」

「嫁ぎ先……ですか」

確かに、ディアナは今年で十八になる。誰かの妻になつてもおかしくない年齢だった。

ディアナが口を開こうとした時、二十代に見える若い

青年が近づいてくるのが見えた。義兄のエルトレスだ。エルトレスは貴族らしい気品さだけでなく、騎士特有の厳格な風格を兼ね備える青年になっていた。

「おはようございます、父上。そして、ダイアナ」

「おはようございます、お義兄様」

「お二人で何の話をしていたのです？」

エルトレスは普段、貴族の子弟として王宮騎士団に出仕しているが、今は休暇を貰い、自領に帰ってきていた。

「ダイアナをそろそろ嫁がせねばならないことを話していたのだ」

エルトレスは眉をひそめた。

「まだ早いではありませんか？ ダイアナはまだ十八でしょう」

「しかし、そなたの母は十八の時にこの家に嫁いできたぞ」

エルトレスは口を噤んだ。

エルトレスの母は、彼が十歳になる年に、病で亡くなってしまった。オルフェは後妻を娶ることなく、今に至っている。

「ガングニール伯のルーベンスはどうであろう」

ルーベンスはエルトレスとも親交のある貴族だ。

「ルーベンスですか。確かに、あいつは家柄も良いですし、愛嬌もある男ですね」

ダイアナもルーベンスとは何度か会ったことがある。

ルーベンスは快闊な青年で、ダイアナは彼の冗談で笑ったことが何度もあった。

「でも、お義父様。身分の高い家の方には、できれば嫁ぎたくありません」

「何故だ？」

「相手の方の身分が高すぎますと……その方に申し訳ないですわ。私のこの身には、平民の血しか流れていませんもの」

「そう自分を卑下するな。今のお前は、高い教養を兼ね備えた立派な、貴族の娘だぞ」

その時、家来の一人がオルフェの元へ駆け寄ってきた。

「オルフェ様、教会からの使者が来ました。お目通りを願っております」

「教会からだど？」

それから家来は、ダイアナに視線を移した。

「そして、使者はダイアナ様にもお目通りを願いたいと申しております」

ダイアナは義父と顔を見合わせた。

「そなたがダイアナ・レニングラード殿か」

「はい」

使者は巻物状の羊皮を開くと、懇懇に告げた。

「ダイアナ・レニングラード。貴殿を、神使にせよとのお告げがあった」

オルフェとディアナは目を丸くした。

神使とは、女神アステリアに選ばれた娘のことだ。

「私が……」

この命を断ることは許されない。ディアナは使者に頭を下げた。

「謹んでお受け致します」

神使は、女神アステリアから選ばれた者として、政にも口を出せるほど絶大な影響力を持つことになる。神使の家族もまた、教会から重宝され、過去には神使に選ばれた農民の娘の家族が、貴族に取り立てられたこともあった。

それほど、神使になる、ということとは名誉なことだ。しかし、それは同時に、ディアナはレニングラード家の者ではなくなることを意味していた。

教会からの使者が帰ると、オルフェは嬉しそうに目を細めた。

「まさか私の娘が神使に選ばれるとは……。おめでどう  
ディアナ」

「はい。……私もまだ、信じられません」

「以前、そなたを養子にしたのは、アステリア様のお告げを受ける夢を見たからだと話したな」

「はい」

その話を聞いてから、ディアナは毎日祭壇で祈りを捧

げるようになった。

「荒廃したグエン村で、壊れた家の物陰にいるお前を見つけた時は……驚いた。アステリア様は、そなたを神使にするために、お前を生かすために、あのようなお告げをしたのだらうな」

「お義父様」

ディアナは跪いた。

「私を……養子にして下さって、ありがとうございます  
た。やつと恩返しの一部ができます」

オルフェは無言のまま手で、娘に立つよう促した。

「私もそなたのような聡い娘を持って、幸せだったぞ」  
言い終わるや否やオルフェは咳き込んだ。

「大丈夫ですか？」

「——ああ」

近頃、息が漏れるような変な咳が出るようになった。  
オルフェは、自分がそう長くないことを、予感していた。

「エルトレスにも報告して来い」

「はい」

客人の間から出ると、傍らに控えていたカタリーナが  
声をかけてきた。

「ディアナ様、おめでどうございます」

ディアナは目を細めた。

「ありがとうございます」

「でも……」

カタリーナは視線を落とした。

「お寂しゅうございます」

彼女の声色から、カタリーナは本気で寂しがっていることが分かった。

「カタリーナ。あなたにも感謝してもらえないわ」

カタリーナは目をしばたいた。

「あなたは、私が平民の出だと知っても、ずっと私の身の回りの世話をしてくれた」

「それは、当然のことでございます。私はディアナ様の侍女ですもの」

「ええ。でも……侍女の皆が私を受け入れてくれた訳じゃないわ」

ディアナがレングラード家の屋敷に来たばかりの頃、ディアナを妬み、陰湿な嫌がらせをしてきた者もいた。

苦い思い出を無理矢理胸に押し込むと、ディアナは口を開いた。

「お義兄様にもご挨拶しないと。お義兄様はどこにいらっしゃるの？」

「ご家来衆と剣術の稽古をなさっているのではないでしようか」

エルトレスは、休暇中でも、武術の鍛錬を欠かさなかった。

「そうね。庭へ行ってみよう」

庭へ近づくと、剣と剣がぶつかり合う金属音が聞こえてきた。

エルトレスは鋭い突きで、家来を後退させている最中だった。剣術稽古をしているときのエルトレスは、普段の口数の少なさからは想像できないほど、情熱を帯びた瞳をしている。

ディアナは、義兄の、この鋭い眼差しが好きだった。

エルトレスは家来の反撃を素早くかわし、合間を詰めると、下から剣を振り上げた。

剣をはじめかれ、家来がひるんだ一瞬の隙を、エルトレスは見逃さなかった。

彼はそのまま、剣の切っ先を家来へ突き付けた。

「――参りました」

降参した家来を見ながら、エルトレスは満足そうに、剣を下ろした。

エルトレスの相手をしていた家来はディアナに気づくと、頭を下げた。

家来の動作に、エルトレスも義妹が来たことを知った。

「お義兄様」

「なんだ、もう教会の使者との話は終わったのか」

「はい」

エルトレスは剣を鞘に収めながら、家来に命じた。

「今日の訓練は終わりだ。下がって良い」

「はっ」

それから義兄は、ダイアナに近づいてきた。  
「使者は何用で、お前に会いに来たのだ？」  
「そのことなんですけれども……。私、神使に選ばれたんです」

エルトレスは目を丸くした。

「何？ 本当か？」

「はい。それで、お義兄様にも報告しようと思って」

「そうか……」

義兄の顔が曇る。

「お義兄様、私が屋敷から去るのが寂しいですか？」

義兄のことだ。ぶっきらぼうに「そんな訳あるか」などと言うだろうと、ダイアナは予想していた。

「ああ」

「えっ」

予想に反し、素直な義兄の答えに、ダイアナは目を丸くした。

「何だ、そんなに驚いて」

「お義兄様のことですから、義妹がいなくなったところで、寂しがると思わなくて」

「そなたは私を何だと思っている」

カタリーナは楽しそうに義兄と言葉を交わしている主に、恐る恐る声をかけた。

「あの……ダイアナ様。数式の勉強の時間です。先生も、もう、お着きのはずです」

カタリーナの言葉に、ダイアナは我に返った。

「そうだったわ！ では、ごきげんよう、お義兄様」

慌てて走り去っていく義妹の後ろ姿を見ながら、エルトレスは、自分の感情に、恐れ慄いていた。義妹が家から去ってしまうことが寂しいのは、格別仲の悪い兄妹でなければ、当然だろう。しかし、自分が抱えている哀しさは、義妹に対する感情を超していることを、エルトレスは気づいていた。

家庭教師として屋敷を出入りしている学者たちも皆、ダイアナが神使に選ばれたことに、祝いの言葉を掛けてくれた。

一日の勉強が終わり、ダイアナは庭を訪れていた。初めてエルトレスと出会った場所だった。

ダイアナは花を見ながら、ため息をついた。

「ダイアナ」

名前を呼ばれた方を見ると、義兄が立っていた。

「あら、お義兄様。ちようどお義兄様のことを考えていたんですよ」

「ほう」

「お義兄様、覚えていらつしやる？ ここで、レニングラード家の養子になったばかりで泣いていた私を、叱責して下さったこと」

「……ああ」

二人は、十年前のことを思い出し出していた。

「あの時、私を叱って下さってありがたうございました」  
戦争で親を亡くした子供は、自分だけではない。自分がどれほど幸運だったかを、当時のディアナは知らなかった。

その後、オルフェは孤児院をいくつか建て、領内の復興に力を注いだ。そのおかげで、ディアナの故郷も、現在にかけての姿を取り戻そうとしている。

「礼を言われることでもない」

夕陽のまぶしさに、エルトレスは目を細めた。

「綺麗だな。——お前の髪の色は、夕陽のようだ」

まるで自分が綺麗だと言われたようで、ディアナは心臓が跳ね上がるような気がした。

義兄は微笑した。

「夕陽を見るたびに、お前を思い出さだろうな」

そう言われた瞬間、心臓が締め付けられるように苦しくなり、鼻の奥がツンと痛んだ。

ディアナは何故か、オルフェと別れるよりも、エルトレスと別れることの方が、辛く感じた。

(貴族たるもの、泣いては駄目よ)

ディアナは愁いを秘めた、笑みを浮かべた。

「では、私は日が沈んだ後、空を見上げることにします。それで、お義兄様のことを思います」

エルトレスの髪は、日が沈んだ直後の空のような、濃

紺色をしている。

義兄は視線をそらした。

「もう二度とお義兄様とお呼びすることができないなんて」

「そのような顔をするな。名譽なことなんだぞ」

エルトレスは優しい目を、ディアナに向けた。

「たとえ義兄妹ではなくなっても、私はそなたのことをいつも想っているぞ」

その言葉を聞き、ディアナは胸が熱くなるのを感じた。

「私もです、お義兄様」

この時の二人を、何も知らぬ者が見たら、二人のことを義兄妹ではなく、夫婦か恋人同士だと思っただろう。

この時の二人の目は、互いに愛しい人を見る瞳をしていた。

レニングラード家当主のオルフェは、ディアナが屋敷を去ってから一年も経たぬうちに病で亡くなってしまった。

エルトレスは自領を統治する責務を負うことになったため、王宮騎士団を退団し、王宮を去っていた。

エルトレスが領主となって三か月ほど経った頃、レニングラード家の屋敷を、ガングニール伯の長子、ルーベンスが訪れた。



「お久しゅうございます、レニンググラード伯」

うやうやしく挨拶を述べた後、ルーベンスは唇をニツと上げた。

「エルトレス！ 幼馴染が来てやったぞ」

「ルーベンス」

エルトレスは胸をなでおろした。自分の義妹が神使になつたことで、友人の態度が変わってしまったのではないかと、一瞬不安に感じたのだ。

「騒々しい。せつかくの休暇だろう、早く自領に戻つたらどうだ」

「照れなくていいんだぞ、私に会えて嬉しいくせに」

エルトレスは無言で視線をそらした。これが、彼が照れた時の癖だということを、ルーベンスは知っていた。

「騎士団の方は変わりないか？」

「変わりないな。まあ、お前のように家督を継ぐとかで退団した方もいらつしやるけど」

それからルーベンスは眉をひそめた。

「ちなみになんだが……やはり言葉を改めた方が良いか？ レニンググラード家は神使様を輩出しましたし、エルトレス殿は家督を継ぎましたし」

「私がどうしてほしいかは、お前なら分かっているだろうよ」

ルーベンスは口を開けて笑った。

「それは嬉しい言葉だな」

エルトレスはふいに、父とディアナの嫁ぎ先のことを話したことを思い出した。

「どうした？ 私の顔に何かついているか？」

「いや、昔父上と神使様の嫁ぎ先について話したことがあってな。そのことを思い出したのだ。候補に、お前の名前が挙がつたんだぞ」

ルーベンスは頓狂な声を上げた。

「へえ、そのような話があったとは」

それから、ルーベンスは椅子に腰かけた。

「そういえば、私も妻を娶ることが決まったぞ」

今度はエルトレスが頓狂な声を上げる番だった。

「何だと？ 手紙にはそのようなこと書いてなかっただろう」

「まあ、お前を驚かそうと思ってな」

ルーベンスは足を組んだ。

「お前も早く妻を娶つたらどうなんだ？ もう二十五だろ？」

青い瞳が、探るようにエルトレスを見てきた。この幼馴染は飄々としているようで、実は人の機微に敏感であることを、エルトレスは知っていた。

「私はまだいい。領主になつたばかりで、領内の統治で頭がいっぱいだからな」

「そうか。——エルトレス。これは年配者からの忠告なんだが」

「一歳しか違わないだろ」

「茶々を入れるな。——自分の心に正直になれよ」

「何？」

「恋しい女性がいるなら、どのような形でも、その人と結ばれようと努力してみてもどうだ」

エルトレスは鼻で笑った。

「——はっ。ふざけたことを。私に恋しい女性がいると勘違いしているようだが」

ルーベンスはしばしの間、黙ってエルトレスを見ていたが、ため息をつくると、王家の紋章付きの手紙を差し出した。

「これは殿下からの手紙だ」

エルトレスは訝し気な視線を幼馴染に投げかけた。

「この前、父の使いで王宮に向いたのだ。その時、殿下から受け取ったのだ」

エルトレスは、王子からの手紙を広げた。そこには、神使がいるアステリオス神殿に向いた後、王宮へ顔を出すよう書かれていた。

「なぜ、神殿へ……？」

「私は手紙の内容を詳しくは知らないが……恐らくそなたを、神使様に会わせたいのだろう。——殿下は教会のことを良く思われていない。何とかして教会の権力を抑え込み、王家の権威を復活させようと画策している」

事実、今のこの国では、教会に君臨する大司教が、国

王と同じほどの権力を持っている。

「殿下に何かお考えがあるのは確かだな」

「この手紙を託されたとき、殿下と何か話したか？」

ルーベンスは出された茶を飲み干してから、口を開いた。

「まあ、いろいろと」

「歯切れの悪い奴だ」

ルーベンスは苦笑した。

「そう怒るな。殿下に謁見すれば、私が殿下と何を話したか分かるだろうから」

ルーベンスは茶器を皿の上に置いた。

「ゆっくりとしたいのは山々なのだが、夕刻にはここを発とうと思っている」

「ああ。お前も婚儀の準備で大変だろうからな」

ルーベンスは茶化すような笑みを浮かべた。

「もっと私と過ごしたいだろうが、辛抱してくれ」

「そのようなこと微塵も思っていないから大丈夫だ」

ルーベンスは思わず声を上げて笑った。表情も変えずに、即座にそう言い放つてしまう幼馴染が、面白くて仕方なかった。

「やっぱりお前といると楽しいな」

「——ああ。私もだ」

「……エルトレス」

ルーベンスは、すでに笑っていないかった。

「殿下がどのようなお考えでも、神使様をお守りしろ。  
——愛しい女性を守れぬのは、騎士の名折れだ」

エルトレスは何か言おうとして、止めた。この幼馴染には、何もかも見透かされているようだ。

神使は、普段アステリオス神殿で生活していた。アステリオス神殿は、女神の名前を由来にしているだけあり、国で一番重要な神殿で、貴族も滅多なことでは立ち入れない場所だった。

エルトレスは自領を叔父に任せ、神使に謁見するために神殿を訪れていた。

久方ぶりに見る義妹は、繊細な刺繍が施された、仕立ての良い白い装束に身を包み、気品にあふれていた。

「お久しぶりです、レニングレード殿」

この一年ほどで、義妹はすっかり大人の女性に成長したことを、エルトレスは感じた。

「神使様もお変わりなく」

神使は目を細めた後、周りの神官たちに命じた。

「皆下がっていなさい。私はレニングレード殿と話があります」

人払いをされ、エルトレスが訝しんでいると、ディアナの目が伏せられた。

「お義父様の葬儀に出られず、申し訳ありませんでした」

そう言われ、エルトレスは、ディアナが人払いをした理由が分かった。

「とんでもございません。父も神使様のお立場のことは理解しているでしょう」

神使は——表向きだが——中立の立場を貫かなければならず、特定の家の者を懇意にすることは許されていない。そのため、ディアナは義父の葬儀に参列できなかった。

ふいに、ディアナの胸の中に静かな哀しみが広がった。  
(私は、二度も父を失ったのか)

ディアナは哀しみを押し殺し、レニングレード伯に声をかけた。

「本日は殿下の命で参られたとか」

「はい」

神使が代替わりする際、王家の人間が新しい神使に挨拶に来るのが恒例となっている。

ディアナの代の場合、大司教は、国王の正妃の第一子であるロベルトに神殿に向くよう要請したそうだが、国王はその要求を吞まず、側室の王子を派遣していた。

「殿下のご用件は何でしょうか？」

「手紙で拜命したのですが……。ただ、神使様にお会いせよ、としか書かれていませんでした」

「そうですか……」

ディアナはロベルトの思惑が分からず、眉をひそめた。

代替わりの際の態度を見る限り、ロベルトは恐らく教会を快くは思っていない。

「恐らく、私が気兼ねなく神使様のご機嫌伺いに行けるよう、ご配慮されたのでしょうか」

そこで、ディアナは、エルトレスが王子の学友だったことを思い出した。

「そういえば、レニングラード殿は殿下のご学友でしたね」

「はい」  
「では、殿下のご厚意に甘えるとして……。今日は久々の再会を喜びましょう」

そう言いながらもディアナは、ロベルトが、単純に、エルトレスが義妹に会えるよう取り計らった訳ではないことを、心の片隅で感じていた。そして、神使が、王子の意図を訝しんでいることは、エルトレスも分かっていた。

「レニングラード殿。屋敷の方で何か変わりはありませんか？」

義兄を苗字でしか呼べないことに、ディアナは寂しさを覚えた。

「そうですね……。神使様も覚えていらつしやると思いますが、侍女のカタリーナが嫁ぎました」

「まあ」

神使は嬉しそうに声を上げた。

「どなたの元へ？」

「屋敷に出入りしていた商人に嫁ぎました。どうやら、その者はカタリーナに一目ぼれしたそうで……。相手は三十と、カタリーナとそう年も離れていなかったため、本人の意向を聞いてから、嫁がせました」

「そうですか」

神使は、前任の神使が亡くなると、代替わりが行われる。一度、神使に選ばれた者は、生涯神使を辞することには許されない。神使は純潔であることが求められており、それは、一度神使となった者は、生涯夫を持つことは許されないことを意味していた。

誰かの妻になれたカタリーナを、ディアナは同じ女として羨ましく思った。

「……レニングラード殿は」

恐ろしい答えを聞きたくないはずなのに、ディアナはつい尋ねてしまった。

「婚姻話などは頂いてないのですか？」

恐怖で、心臓が痛い程鼓動している。——自分は、エルトレスが誰かの夫になるのを恐れているのだ。

「神使様」

エルトレスに真つすぐに見つめられ、思わずディアナは息を呑んだ。

「私は……」

エルトレスは義妹を見据えたまま、答えた。

「私の愛する人は、生涯夫を持つことが許されない方なのです」

ディアナは目を丸くした。

「それは……」

「神使様。告白致します。——私は、義妹に想いを寄せていたのです」

ディアナは必死に涙を堪えた。嬉しいはずなのに、涙が溢れてきた。

「駄目よ、お義兄様」

ディアナはわざと、名前で呼ばなかった。

エルトレスは口を噤んだ。

「私の立場を思い出しなさい、レニングレード殿」

ディアナは義兄に背を向けようとしたが——エルトレスに右腕をつかまれた。

「ディアナ！」

ディアナは、義兄の瞳に引き込まれた。剣術稽古の時でも見たこと無い程、熱を帯びた瞳だった。

「お前は……それで良いのか？」

ディアナは息を呑んだ。

「……どういう意味でしょうか？」

「私は、そなたを愛してる。——義妹ではなく、女性として」

ディアナは息をのんだ。しばらく、何の音も聞こえてこなかった。その瞬間は、瞬きする程短い時間だったか

もしれないが、ディアナにとっては、長く感じた。

「お義兄様……」

しかし、ディアナは目を瞑って頭を振った。

「レニングレード殿。今日はもうお帰り下さい」

「ディアナ」

「——お帰り下さい」

ディアナは部屋の扉の先に、声をよこした。

「レニングレード殿のお帰りで。扉を開けなさい」

神官が部屋の扉を開ける気配を感じ、エルトレスは慌ててディアナの腕を握っていた手を離れた。

神使は、視線も合わせてくれない。今日は帰るしかなさそうだ。

エルトレスが神殿を後にするときには、すでに日が傾き始めていた。

『夕陽を見るたびに、お前を思い出すだろうな』

そう言ったのは、一年ほど前か。義妹が神使になった時、これでよかったのだと、安堵する気持ちがあった。

滅多なことではディアナに会えなくなれば、おのずと自分の想いは消えていくものだと思っていた。しかし、実際はその逆で、どれほど想いを消し去ろうとしても、気

持ちは日に日に増していくばかりだった。

その日の夜、ディアナは寝台の枕に顔を押し付けると、声が漏れないように泣き続けた。

おそらく、自分の想いは、エルトレスと同じものだ。しかし、女神に選ばれた娘が、義兄と恋仲になるなど、考えられるはずがなかった。もし、仮にディアナがエルトレスの想いを受け入れたとしたならば、女神を信仰する民の信頼を失墜させることになるし、レニングラード家も無事では済まないだろう。

(アステリア様選ばれなかったら……)

レニングラード家の養子のままだったら、外聞は悪くても、エルトレスの想いを受け入れたかもしれない。

「いっそのこと死んでしまいたい……」

死んでしまえば、こんな苦しい思いはしなくてすむかもしれない。

ディアナは寝台から起きると、寝室の窓辺へ歩いて行った。

窓を開けると、冷たい夜風が頬に触れた。窓の下へ視線を向けようとしたが、その日は丁度満月で、自然とディアナの視線は、空へ向けられた。

(綺麗……)

疲弊した彼女の目には、月が、余計に綺麗に映った。『では、私が沈んだ後、空を見上げることになります。』

それで、お義兄様のことを思います。ふいに、一年前に交わした、エルトレスとの会話を思い出した。それを皮切りに、義兄との思い出が洪水のように、次々と押し寄せてきた。

『いいか、お前は運が良い方なのだぞ!』

幼い頃、義兄に叱責された時の言葉を思い出した。先の戦争で亡くなった者は、大勢いる。ディアナの実の両親も、戦争の犠牲になった。

自分が今まで生きてこられたのは、様々な幸運が重なったからなのだ。——愛しい男への想いが苦しくて死ぬ道を選んだら、両親や義父はどう思うだろう。

落ち着きを取り戻すと、自身が行おうとしていた行為の恐ろしさが迫ってきて、ディアナは急いで窓を閉めた。

「アステリア様、お許しください」

ディアナは暫く床に跪きながら、女神に懺悔していた。

昨夜はほとんど眠れなかったが、ディアナは神使の日課である、朝の祈りを捧げていた。神使とは、女神の声を聴き、それを代弁する存在だと、以前までは信じていた。しかし、現実とは違った。神使とは、大司教の要求を女神アステリアのお告げとして、公表するだけの、言わば大司教の操り人形だった。

朝の祈りが終わると、大司教が朝の挨拶に来るようになっていた。

大司教はディアナの前に来ると、頭を下げた。

「おはようございます、神使様」

「大司教もお変わりなく」

「神使様。昨日、アステリア様からのお告げがありました」

た」

思わずディアナは笑みを消した。

「……一体どのような？」

「免罪符を発行するのです」

ディアナは眉をひそめた。

「免罪符？」

「はい。先の戦争から十年余り経ちますが、未だに人命を殺めたことを後悔する者がたくさんいると聞きます。

そして、いつの時代でもですが、罪を犯す者はいるものです。それらの者たちに、死後、魂が天に召されるよう免罪符を配るべきだと、お告げがあつたのです」

「……その免罪符は、自らの罪を心から悔やんでいる者に、無償で配るのですか？」

大司教は頭を振った。

「いいえ。その者がどれほど罪の意識に苛まれているかは、他人からは分かりませぬからな。それに、無償で配布してしまつては、免罪符の価値が実感しにくく、苦しみから解放されづらいでしょう。やはり、金銭で取引するのが妥当だと考えます」

ディアナは平静に異を唱えた。

「大司教。真にアステリア様はそうお告げなされたのですか？　そもそも免罪符の存在自体、いらぬのではな  
いのですか？　経典には、自らの罪を心から悔い改めた者は、皆等しく天に召される、と書いてあります」

大司教は、ディアナを苦々しく思った。平民の出だと聞いていたから都合がよいと思っていたのに、小賢しい娘だ。

ディアナが要求を呑みそうにないと察すると、大司教は鋭い視線をディアナに向けた。

「神使様。兄君を慕うのは良いことですが、少々度が過ぎているではありませんか？」

「……一体何のことです？」

「神官の一人から報告がありました。以前、レニングラード伯が神使様に謁見なさつた際、恐れ多くも神使様の名を呼びながら、腕をつかまれたとか」

ディアナは息を呑んだ。——人払いしたにもかかわらず、神官の一人が、部屋を覗いていたということだ。

「一体そのようなことを言つたのは、誰なのです？　名を言いなさい」

「神使様。ご自身の行いを棚に上げ、神官を責めるのですか。その神官は、神使様がアステリア様に選ばれた方にもかかわらず、道に外れたことをしないか見ていただけです」

「道に外れたこと……」

大司教は頷いた。

「はい。神使様は、純潔である必要がございます。万が一のことがあつては、アステリア様の怒りに触れます。——ましてや、その相手が兄君であるとなると……」

「口を慎め」

怒りのあまり、声が震えていた。

「レニンググラード殿とは、そのような関係ではない。邪推を申すのは止めよ」

大司教は大仰に頭を下げた。

「失礼致しました。——ですが、神使様。これからは言動に注意なされませ。いつ、誰が見ているのか分かりませぬからな」

そう言い残すと、大司教は部屋から出て行つた。

思わずディアナは部屋にいる神官を見渡した。神官たちは、皆、目を伏せていて、誰が部屋を覗き込んでいたのか分からなかった。

——ここには、カタリーナのように信頼できる者もないのだ。

(助けてお義兄様)

ディアナは女神ではなく、心の中で義兄に助けを求めた。

神殿を後にしたエルトレスは自領に戻ることなく、ロベルト王子に謁見するために王宮へ向かった。

王子の部屋に通されたエルトレスは、王子に頭を下げた。

「お久しぶりです、殿下」

王子は友を見る目をしていて。

「久しいな、エルトレス」

エルトレスは幼い頃、ロベルトの学友だった。

「そなたが騎士団を辞して約一年か」

「はい」

「レニンググラード領は国境の近く。この国の要ともいえる重要な土地だ。しっかり統治するのだぞ」

「はっ」

ロベルトはエルトレスに、椅子に腰かけるよう命じた。

「まあ、本題に入ろう。教会のことなのだ」

教会のことと聞き、エルトレスは鼓動が速くなるのを感じた。

「教会は、今や王家に対しても意見を言ってくる。此度の神使の代替わりの挨拶など、陛下の嫡子たる私に、神殿に赴くよう要求してきた。——これでは、この国の主権は誰のものか分からぬ」

「……」

義妹が神使になっている以上、エルトレスは何と云うべきか分からなかった。

「しかも、神使を通じ、教会は様々な要求をしてくる。

……女神に選ばれた者の言葉だから、ということでは王家は教会の言いなりになったこともある」

エルトレスは、王子が何を言いたいのか分かった。

「そなた、神使について調べたことはあるか？」



「……いえ」

「神使は、平民の娘から選ばれたことの方が圧倒的に多いよ」

「国民の大半が平民だから、当然ではありませんか？」

ロベルトは苦笑した。

「まあ、待て。もう少し私の話を聞いてくれ」

ロベルトは話を続けた。

「そして、平民出の神使は、教会の権力が強まりそのようなことを、お告げとして公表することが多かったのだ。教会が資金を得られるようなことや、中には支援する貴族を増やしたためか、貴族間で揉め事が起きそうなことまで『女神のお告げ』という大義名分をかざし、公表してきた。そして、そなたの義妹が神使になってから、教会は貴族間に対することや、教会が私利私欲を満たすようなことは公表されていない」

「エルトレスは、ハツとした。教会は今まで政を知らぬ平民の娘を神使にし、教会の権威を高めてきた可能性があるのだ。」

「エルトレスの様子を見、ロベルトは満足げに笑みを浮かべた。」

「そなた、神使になった後の義妹に会ったか？」

「エルトレスの脳裏に、義兄からの告白に困惑するディアナの顔が浮かんだ。」

「……はい」

「神使は何か大司教について言っていないかったか？」

「いえ、そう言った話はしなかったのだ」

「そうか」

ロベルトは友を見据えた。

「エルトレス。再び神殿に行き、神使に会ってきてほしいのだ。そして、大司教の話を聞いてきてくれ」

エルトレスは一瞬たじろいだ。

「——はっ」

「ロベルトは、エルトレスの一瞬見せた動揺を見逃さなかった。」

「どうした？ そう硬くならなくても良い、義妹の機嫌伺に行くだけだと考えろ」

「いえ、神使様がそう何度も特定の家の者に会ってよいものかどうか、疑問に感じましたので」

「この言葉に偽りは無いが、エルトレスが一番懸念していることは、それではなかった。」

「しかし、エルトレスが義妹に想いを伝えたことを知らないロベルトは、特に疑問を感じることもなく答えた。」

「義妹が神使になって以来、会うのは次で二回目だろうか？ 特定の家の者を懇意にしているとは言えない」

「エルトレスは黙っていた。」

「陛下もなんとか、教会の権力を抑えたいとお考えだ。義妹が神使になったそなたに、先ほどのような話をするのは心苦しいが……」

「お気になさらないで下さい。此度の話を聞き、私も神使様に尋ねたいことができました」

エルトレスは目を閉じた。

「……殿下は神罰が恐ろしくはないようですね」

ロベルトは苦笑した。

「まさか、そなたからそのようなことを聞かれるとはな。

そなた、信仰心が厚い方だったか」

「いいえ。——強いて言えば、食事の前に祈りを捧げるくらいの信仰心はありますが」

それは貴族という立場上、当然のことだろう。

ロベルトは、はつきりと言いつつ切った。

「私は、成し遂げたいことがあるならば、神罰など恐れぬ」

自領に戻った後、エルトレスはすぐに、自分が領主になる前の帳簿を調べた。すると、父はディアナが神使になった直後、教会に多額の資金を寄付していたことが分かった。

（なるほど。貴族の娘を神使にすれば、多額の寄付金を得ることができるのか）

資金を得るため、教会はたまたに、貴族の娘を神使に選んでいるということだ。

帳簿を仕舞った直後、部屋の扉がノックされた。

「——エルトレス、私だ。入るぞ」

そう言いながら叔父が入ってきた。

「叔父上、私が領地を離れている間、ありがとうございました。しかし、戻ってきて早々なのですが、私は殿下の命で、再びアステリオス神殿に行かなくてはなりません。引き続き領地のこと頼みます」

叔父は苦笑した。

「そなたも領主になったばかりだというのに、大変だな。——領地や領民のことは何も心配するな」

エルトレスが再びアステリオス神殿へ行くと、以前と違い、すぐに謁見の間へ案内されることは無く、客人の間に通された。

綿が大量に入れられた、柔らかい椅子に座っていると、ほどなくして、豪華な聖職者の服を身につけ、自信に満ち溢れた男が出てきた。——大司教だ。

大司教は頭を下げた。

「これはこれは。レニングレード殿」

エルトレスも椅子から立ち上がり、頭を下げた。

「殿下の命で参った。神使様にお目通り願いたい」

エルトレスは王家の紋章付きの洋紙を差し出した。

「なるほど。確かに殿下の命ではあるようですが……」

大司教は頭を振った。

「お目通りを許すことは出来ませぬな」

エルトレスは眉をひそめた。

「何故です？」

「失礼ながら、以前神使様にお会いになった際、レニンググロード殿は、神使様の腕を掴まれたとか」

「……誰から聞いたのだ」

「さあ、誰でしょう。神使様かもしれませぬし、神官の一人やもしれませぬな」

エルトレスは口を噤んだ。もし、神使本人が大司教に報告したのなら、神使に会える可能性は、絶望的だ。

（しかし、本当にディアナ自身が報告したのか？）

そのような報告をすれば、レニンググロード家が、教会から睨まれると考えるはずだ。それとも、家のことを顧みても、それでも報告したいほど、自分の想いが嫌だったかのか。

エルトレスは深く頭を下げ、謝罪の意を表した。

「その件につきまして、申し訳ありません。少し言い争いがおきまして、つい騎士にあるまじき行動をとってしまったしました。此度は、殿下の命で参ったのもあります。この間の件を、神使様に謝罪したいという思いもあり、神使様に謁見することを強く望んでおります」

大司教はしばらく黙っていたが、エルトレスに近づくと、耳打ちしてきた。

「ならば、謝罪料を教会にお納めください。ご父君がご自身の娘が神使様になった際の資金の、半分です」

かな？」

「何だと……！」

エルトレスは形の良い眉を吊り上げた。

「そなた、昨年が例に見えない不作だったことを知っているだろう！」

今、多額の資金を渡せば、領民が疲弊するのは明らかだった。

「そなた、私の行いに非があったことを糧に、殿下の命を拒むつもりか」

大司教が再び何か言おうとした時、赤毛の女性が客人の間に入ってきた。神使はエルトレスの姿を認めると、目を丸くした。

「レニンググロード殿！」

エルトレスは神使に頭を下げた。

「神使様、殿下の命で参りました」

ディアナは大司教を問い詰めた。

「大司教、私は何も聞いておりません。何故、レニンググロード殿が参られたことを知らせなかったのです」

大司教は静かに答えた。

「私は、神使様の身に何か起こらないか、心配だったので」

ディアナは、以前大司教に言われた言葉を思い出し、口を噤んだ。邪推されていることに何も思わない訳ではないが、感情を露わにする気にもならなかった。

「大司教が懸念するようなことは起こりません。——レニングレード殿、こちらへ」

エルトレスは神使の後をついていった。

神使の、謁見の間へ入る直前、エルトレスは随行してきた自身の守役に命じた。

「そなたはここで待っていてよ」

「はっ」

エルトレスの命を聞き、廊下で控えていた神官が慌てた。

「あの、それは困ります」

「この者は、私の守役だ。ここで待っていても問題はな  
いだろう」

「しかし……」

「何だ、私の守役がここにいることで、そなたらに都合の悪いこともあるのか」

神官は口を噤んだ。神官が引き下がったのを認めると、

エルトレスは謁見の間へ足を踏み入れた。

神使の前へ行くと、エルトレスは跪き、頭を下げた。

「お目通りをお許し頂き、ありがとうございます」

「いえ」

二人の間に、得も言われぬ空気が広がった。エルトレスは立ち上がると、あえてこの前の告白には触れずに、話を切り出した。

「神使様、先ほどはよく客人の間へいらつしやいましたね」

「あれは偶然だったのですが……。庭園に行こうと客人の間の近くを通りかかったのです。そうしたら、レニングレード殿の声が聞こえてきたので……」

「先ほどは助かりました。神使様がいらつしやらなかったら、こうしてお目通りすることが叶わないところでした」

エルトレスの言葉で、大司教が、ディアナにエルトレスを会わせないようにしていたことを悟った。

「神使様。無礼を承知でお尋ね致します。大司教殿から何か口出しされるようなことが今までありませんでしたか？」

義兄の言葉にディアナは、ハッとしました。——義兄は、神使の制度に疑問を感じているのだ。

「レニングレード殿。それは一体どういうことですか？」

「神使とは、女神の声を聴き、それをお告げとして公表する存在。しかし、過去の神使が公表したお告げの中には、教会の権力を強める目的のようなものも多くあったので、疑問に感じただけです」

ディアナは、平静を装うとしたが——本当のことを告げたくてたまらなかつた。何もかも義兄に本当のことを話したい、言葉が喉まで迫ってきていた。

「私の義妹は嘘を隠すとき、必ず視線を落としたのです」

が……その癖は直っていないようですね」

「……お義兄様」

ディアナは、弱々しく呟いた。

「でも、神官が大司教に……私は見張られているも同然です」

「ご安心ください。廊下には、私の守役が控えておりません。怪しい動きをした神官がいれば、その者が押さえてくれるでしょう」

それを聞き、ディアナは決心がついた。ディアナは義兄に縋るような視線を向けた。

「助けて」

エルトレスはディアナの目を見据えた。

「辛かったら、今ここで全てを話してください。——私は、そなたの力になりたい」

「お義兄様！」

ディアナは、義兄の胸にしがみついた。

「私は……もう神使をしていたくありません」

エルトレスはディアナを優しく抱きしめた。

「ディアナ……。私がそなたを守る。安心しろ」

エルトレスの腕の中に収まっていると、次第に罪悪感や不安が和らいでいくのを感じた。

エルトレスは腕の力を緩め、ディアナの顔を見た。

「そなた、神使という制度に疑問を持ったことは無いのか？」

ディアナは顔を伏せた。その様子から、ディアナも神使の制度に疑問を感じていたことが分かった。

「大司教は、何かお前に口出ししてこなかったか？」

ディアナは、義兄の腕から離れると、ため息をついた。

「——何度かありました。アステリア様が、このようにおっしゃっていると、公表するよう指示を受けたことがあります」

「やはり」

エルトレスはディアナに、ロベルト王子と自分の推測を話した。エルトレスの話聞いても、ディアナが驚く様子は無かった。

「お義兄様」

ディアナは、何か決心したような表情をしていた。

「次、いつお会いできるか分からないから……今、伝えておきたいことがあるのです」

ディアナは愛しい男の顔を見上げた。

「私も……お義兄様のことを愛しています」

エルトレスは微かに目を丸くしたが、それはほんの一瞬のことだった。

「ディアナ……私を義兄と呼ぶな」

エルトレスのその言葉が聞こえた直後、ディアナは唇に何かが触れるのを感じた。口付けされているのだと分かった瞬間、彼女は瞳を閉じた。

女神を裏切る罪悪感と、愛しい者と口付けを交わして

いる幸福感が入り混じり、ディアナは心臓が痛い程鼓動しているのを感じた。

唇を離すと、エルトレスの目の前にいる愛しい女性は、好いた男に口付けされ幸福に包まれていた表情とは程遠い、自身が犯した罪に恐れおののく罪人の顔をしていた。「――後悔しているのか」

「いいえ。分からないの、自分が今、どんな気持ちなのか。あなたと気持ちを通じ合ったのはたまらなく嬉しいのに、アステリア様を裏切ったような気持ちもあって……」

エルトレスの胸に、愛おしさが広がった。彼は、強くディアナを抱きしめた。

「神使が守らなければならぬのは、純潔だろう。口付けだけでは禁忌を破ったことにはなるまい」

何も考えず言い放った直後、エルトレスは気恥ずかしくなって、視線をそらした。とり方によっては、先ほどの発言は、騎士にあるまじきものだったのではないだろうか。

ディアナもエルトレスが何を言いたいのかわかり、頬を染めた。

エルトレスはわざとらしく咳払いをした。

「お前は何も心配するな。女神はそれだけでは怒りはしないはずだ」

「……はい」

何故かエルトレスに「心配するな」と言われると、不安が和らぐ。たとえ、実際は大丈夫じゃなくても、大丈夫だと思える。

謁見の間を去るとき、ディアナが不安げに声をかけてきた。

「大司教から、エルトレス殿とのことでくぎを刺されたことがあったわ。――どうか、お気を付けて」

「何だと？」

「私が義兄と仲が良すぎると。私、感情を隠すのが下手だったみたいね」

「そう自分を責めるな。それは、私のせいでもあるだろう。恋というものは、他人には隠せぬ感情だからな」

エルトレスがそう言った瞬間、ディアナは嘔き出した。「あなたがそんな情熱的なことを言うなんて！ まるでルーベンス殿みたいだわ」

エルトレスは忌々し気に呟いた。

「……その評価はあまり嬉しくないな」

ロベルトがアステリオス神殿を訪れたのは、穀雨（こくう）の月の、風が強い日だった。

「お初にお目にかかります。王位継承者第一位のロベルトと申します」

「こちらこそお初にお目にかかります、殿下。私は、神使のディアナと申します」

ディアナは深く頭を下げた。

ロベルトは、女性のような顔立ちをした、美男子だった。端正な顔立ちのはずなのに、どこことなく冷酷な雰囲気を感じさせているせいも、威厳を感じさせる。

「神使様。正直に申し上げると、私は神使の制度を快くは思っていない」

「……」

「話はある程度、レニングレード伯から聞いております。大司教は、自身の願望を、女神のお告げとして公表するよう、口を出してくるとか」

「はい」

ディアナは目も伏せた。

「神使がアステリア様のお声を聞けぬなら、何故、神使という制度があるのか……」

ロベルトは顎に手を当てた。

「恐らくですが……最初の頃は、教義を広めるため——言わば教会の象徴としての存在として、作られたのでしょう。それは若い娘が神使として選ばれていることから、推測できます」

ディアナは頷いた。

「ええ、それは私も考えておりました」

「そして、いつしか教会の象徴としてではなく、教会の

権威を高めるための道具になっていった」

ロベルトが口を閉ざすと、外の、風が吹く音が部屋に響いた。

「神使様。正直な気持ちをお聞かせください。あなたは、神使の制度をどのようにお考えですか？」

「私は……」

ディアナは一度口を閉ざすと、ロベルトの青い瞳を見据えた。ロベルトが考えていることは、もう十分に分かった。

「私の身はどうなっても構いません。私の願いはただ、これ以上『アステリア様のお告げ』を濫用されないことです」

ディアナの瞳には、強い意志が宿っていた。

それを見、ロベルトは微笑した。愛想笑いではなく、心の底からの笑みだった。

「神使様は、血の繋がりはなくとも、エルトレスに似ていますね」

「え……？」

「お二人とも、強い意志をお持ちだ。私としては、貴方のような方が神使になってくれて、ありがたいと思っています」

何と答えるべきかわからず、ディアナは黙っていた。

「神使様、私の計画を聞いてくれませんか？ 貴方には事前に知っていてもraitたいのだ」

しょうか

小夏の月二十一日は、女神が地上に降り立ったことを祝福する日である。その日は王族と貴族が一堂に会し、アステリオス神殿で式典が行われる。

しかし、今年の降臨祭は事情が違った。式典の十日前に、ロベルト王子の正妃が、男児を出産したのだ。通常、王族に子供が生まれた際、大司教が王宮に出向き、サクラメントを行うのが習わしである。第一王子の、第一子誕生となると、大司教だけでなく、各地の貴族もサクラメントに同席し、祝福することになっている。

そこで、今年降臨祭の式典と、王子の第一子のサクラメントを同日に、王宮で行われることになった。

降臨祭には、神使も参列する習わしとなっている。

ディアナは神官に命じ、旅支度を整えようとしていた。

その時、大司教が神使の部屋に入ってきた。

「神使様。何をなさっているのです？」

ディアナは眉をひそめた。

「式典に備え、旅支度を整えようとしておりました」

「神使様」

大司教は冷酷に言い放った。

「あなたはここでお待ちになっただけでいてください」

「……どうということですか？」

ディアナを見る目には、敬意など一切宿っていないかった。「あなたが殿下と何を企んでいるのかは、予想がつきません。——神使様を王宮へ行かせる訳にはいきません」

ディアナは平静を装いながら、口を開いた。

「何を仰っているのです？」

大司教はディアナの言葉には答えず、周りにいた神官たちに命じた。

「神使様が神殿から出ぬよう、見張っている」

「はい」

ディアナは慌てて、部屋から出ようとした。しかし、神官たちが前に立ち塞がった。

「そこを退きなさい」

神官たちは、身動き一つしなかった。

神官の様子を見届けると、大司教は部屋から出て行き、扉が閉じられた。

「大司教！」

ディアナは力が抜けたように、床に座り込んだ。一体どうしたら……。

小夏の月二十一日。王宮では、無事にサクラメントが終了し、そのまま降臨祭の式典が始まるうとしていた。

「大司教。神使はどうしたのだ？」

「陛下。神使様はご加減が優れませんでしたため、此度の式典



は欠席致します」

エルトレスは、思わずロベルトに視線を向けてしまった。

ロベルトは、表情を変えることなく、友を見つめるだけだった。

「加減が優れぬのであれば、致し方ない。大司教、式典を始めよ」

「かしこまりました」

王宮の広間が、大事な式典が始まる直前の、厳かな雰囲気包まれた時だった。

騒々しく扉を開けながら、小麦色の髪をした闊達な表情の青年が入ってきた。

「我が名はルーベンスIIガングニール！ ガングニール伯の嫡子でございます！」

「ルーベンス！ 何故ここに……」

ルーベンスは父に頭を下げた。

「父上、勝手なふるまい、どうかお許しください」

それから彼は、広間にいる貴族や王族たちにも頭を下げた。

「陛下、皆さま、このような形で参上したこと、どうかご容赦下さい。私は、あるお方をここにお連れしたのです」

ルーベンスがそう言い終わると同時に、白い装束を着た、赤毛の女性が入ってきた。

「私はディアナと申します。——この国の神使です」

広間にざわめきが起こった。

国王は怪訝そうに、大司教を見た。

「大司教、どういうことだ？」

大司教はルーベンスに咎めるような視線を向けた。

「神使様は体調が優れなかったはず。そなたが無理矢理連れ出したのだな」

「違います！ 大司教が、神官たちに命じ私を部屋に閉じ込め、私が王宮に参上できなくしていたのです」

ざわめきはますます大きくなっていった。

嫡子として、国王の一番近くに控えていたロベルトが、口を開いた。

「陛下、私がルーベンスに命じました。此度の式典で、神使が出席できないようにされているならば、神使を王宮へ連れてくるように、と」

「何？」

「単刀直入に申し上げます。私は、神使の制度を廃止するべきだと考えております」

広間にいる貴族たちは言葉を失った。

大司教は怒りを露わにしながら、ロベルトを睨み付けた。

「このようなことが許されると思っているのか！ 神使は、アステリア様の采配で決まった方だぞ！」

「女神の采配などではない！」

今まで黙っていたエルトレスが声を張ったことで、広間のざわめきが収まった。

「神使は大司教、そなたの意向で選ばれてきた」

ロベルトも大司教に厳しい目を向けた。

「政を知らぬ娘を神使に仕立て上げ、意のままに操り教会の権力を強めてきたことは知っている」

「陛下、これをご覧ください」

国王は、レニングラード伯が差し出してきた紙に、目を通した。

「これは、歴代の神使の名簿です。名前の隣に身分が書いてありますが、ほとんどが平民の出だったことが分かります」

「確かに、平民の娘が多かったようだが……。しかし、貴族の娘から選ばれた例もあるではないか」

「父は、義妹が神使に選ばれた後、教会に多額の資金を寄付していました。貴族の娘を神使に選ばば、意のままに、政に口を挟める可能性は減りますが、代わりに多額の資金を得ることができるのです」

エルトレスが話し終えた直後、一人の男爵が声を張った。

「陛下、レニングラード伯の言葉を真に受けてはなりません！ レニングラード伯は殿下のご学友でした。そして、ルーベンス殿とレニングラード伯は幼馴染の間柄だと聞いたことがあります。——つまり、此度の騒動は殿

下の推測を真に受けたレニングラード伯と、そのご友人が起こしたものののです」

男爵の無礼な言い方に怒ることもせず、ロベルトは冷笑した。

「なるほど。そなたの家は、神使を輩出し、貴族に取り立てられたのだったな」

男爵はバツが悪そうに、口を噤んだ。この男爵の先祖は、もともと農民だった。百年近く昔の話だが、神使を輩出したことで、爵位を得られたのだ。

ディアナは大司教に視線を向けた。

「私がレニングラード伯の養子で、平民出身だと知ったあなたは、私を神使に選んだ。貴族と言えど、平民の出の娘ならば意のままにできると思ったのでしょうか」

ディアナは広間にいる全員に、聞こえるよう声を張りながら話を続けた。

「神使とは、アステリア様のお告げを聞く存在だと考えられています。——しかし、実際は違います。大司教が『アステリア様のお告げを聞いた』と神使に報告し、それを聞いた神使が、アステリア様のお告げを公表しているのです。——つまり、神使は大司教の操り人形のようなものです」

貴族間でどよめきが起きたことに構わず、ロベルトは、広間にいる者全員に聞こえるよう、声を張り宣言した。

「よって王家は、神使の制度を廃止することを要求する」

大司教は怒りに声を震わせながら、ロベルトを睨み付けた。

「民がそれを信じると思うか！ 信者がそれを信じると思うか」

大司教は怪しい笑みを浮かべた。

「信仰心とは時に恐ろしい力を持つものよ」

ロベルトは大司教を一瞥した。

「なるほど。神使の実態を信じぬ信者が暴動を起こす可能性があると、脅しているのだな。——ならば、私はその者らを処断しなければならぬな」

近くにいる、異母兄弟たちが息を呑む心配がしたが、ロベルトはそちらには目もくれず、大司教と貴族たちを見渡した。

「慈悲なき王子と罵られようと、私は王家の力を取り戻し、この国の秩序を取り戻す」

ロベルトは、国王に視線を移した。

「陛下こそが、この国の秩序です！ 陛下、ご英断下さい！」

国王は、自分の長子を恐ろしく感じた。まだ二十代前半で王妃譲りの端正な顔立ちをしているのに、王族としての威厳は自分よりもあるように感じられた。

「大司教、神使の制度を廃止せよ」

大司教は言葉を失った。しかし、すぐに首を振りながら、弱々しく声を出した。

「女神にたて突くなど……陛下と言えど許されることではありませんぞ」

「余は、女神を否定している訳ではない。そなたらが聖職者としての務めよりも、己の権力を強めることを優先している現状を正そうとしているだけだ」

「陛下！ 神使の制度を廃止するなど……女神の怒りに触れます！」

「神罰が下ります！ どうか、この国のためにも、お考え直し下さい」

「神罰か……」

国王はため息をついた。

「昨年は、今までに例を見ないほどの不作の年だった。しかも、今年は隣国イニフェルの挑発行為が目立っている。……神罰ならば、もう、とうに受けているようなものであろう」

国王も神使を廃止する意思が固まっていると悟ると、大司教はディアナを睨み付けながら忌々し気に叫んだ。

「すべてはお前のせいだ、義兄に身を捧げた売女め！」

「貴様！」

エルトレスは怒りのあまり、今にも大司教に掴みかけりそうになったが、国王の御前である、という状況が彼の理性を保たせていた。

大司教の先ほどの言葉は、広間をざわつかせるには十分だった。

「義理とはいえ、兄妹で……」

「神使ともあろう方が……」

広間にいる多くの視線が、針のようにディアナとエルトレスに刺さった。

「お待ちください」

広間のざわめきを取めたのは、ルーベンスだった。彼は、友が窮地に立たされても、冷静だった。

「大司教、皆様方。それは語弊があると思いませんか？」

大司教は眉をひそめた。

「何だと？」

「神使は、純潔であることが絶対条件です。もし、大司教の言葉が真実ならば、大司教は禁忌を犯した娘を、神使として黙認していた、ということになりませんか？」

ガングニール伯も、息子の言葉に頷いた。

「確かに。もし、大司教のお言葉が真実ならば、ルーベンスの言う通り、大司教は禁忌を容認していたことになりませぬ」

続けてリベリア子爵も口を開いた。

この子爵の次女は、ルーベンスに嫁いでいた。

「皆様、冷静になつて考えましょう。大司教も、落ち着かれてはいかがですか？ 先ほどから言葉が乱れておりませぬ」

大司教は、ロベルトを指さした。

「おのれ、ロベルト……！！ そなたには、必ずや女神の

神罰が下るだろう。死後、天に召されることもなく、地獄で苦しむがいい」

ロベルトも大司教に冷たい目を向けた。

「地獄で苦しむのは貴様の方だ。女神の名を借り、私利私欲を満たした穢れた聖職者め」

大司教が口を閉ざした直後、国王は厳かに告げた。

「大司教、神使の制度を廃止せよ。皆のものがどう申そうと、余の考えは変わらぬ」

大司教は怒りのためか、アステリオス神殿への帰路へついた途端、気が狂ったように、叫び続けていた。

その後、程なくして大司教の代変わりが行われた。

カタリーナは現在、レニングラード領の商家の内儀をしている。夫は、レニングラード伯の屋敷に出入りしているが、現在のレニングラード伯は、エルトレスではない。

神使の制度が廃止されて程なくして、エルトレスは家督を叔父に譲り、レニングラード家を出奔した。その後エルトレスの消息を、カタリーナは知らない。

教会の権力を抑え込むことに成功したロベルト王子は、神使の制度が廃止されてから三年経った頃王位を継ぎ、

国王となった。しかし、即位から数年した後、幼い子供を残して病に倒れ崩御してしまった。若き国王の早すぎる崩御に、神罰が下ったとか、教会の者か腹違いの兄弟に毒殺されたのだから様々噂が流れたが、平民であるカタリーナが真相を知る由もない。現在は幼い国王が、家臣たちに支えられ、国を統治している。

カタリーナは今日、夫の仕事の手伝いで、レニングラード領のシヴェリ村に来ていた。

取引先との商談をするため、村の外れの方へ向かっていたところ、道端で、日が沈んだ直後の空のような、濃紺色の髪の少女が泣いているのが見えた。

カタリーナは思わず、その少女に声をかけた。

「どうしたの？」

少女は顔を上げた。見たところ、五、六歳ほどだろうか。

「お母さんとはぐれてしまったんです」

「まあ、大変だわ。一緒にお母さんを探しましょうか」

カタリーナの言葉を聞いた途端、少女の顔に笑みが浮かんだ。

「本当?! ありがとうございます」

カタリーナは少女と歩き出した。

「お母さんはどんな人なの？」

「お父さんは、村の自警団の団長をしていて、お母さんは孤児院で働いているんです」

「へえ」

カタリーナとしては、母親の容貌の特徴を聞いたつもりだったが。しかも、聞いてもいないのに、ご丁寧な父親のことも教えてくれた。子供とは、聞いてもいないことも話してしまうものなのかもしれない。

少女と話ながら、カタリーナは、少女の言動から彼女が厳しくしつけられて育ったことを感じていた。

「あなたのお父さんとお母さんは、立派な方なのでしょうね」

少女は恥ずかしそうに視線をそらした。どうやら両親を褒められ、照れているらしい。

カタリーナが少女の名前を聞こうとしたとき、女性の声が聞こえてきた。

「アリアスー! どこにいるの」

「あつ! お母さん。ありがとうございます! お母さん見つかりました!」

カタリーナは少女がお礼を言ったことに気付かなかつた。ただ、果然と少女の母親——夕陽を思わせる赤毛の美しい女性を見つめていた。

少女の母親も、カタリーナに気づくと、目を丸くしたが、すぐに笑みを浮かべた。

カタリーナは、かつての主の名前を呟くと、少女の母親に駆け寄った。